

冬初の出遊

陸

遊

寒驢渺渺煙津も渉る

十里の山村興を発して新

青旆の酒家黄葉の寺

相逢は俱に是れ画中人

【作者】陸游(りくゆう)(一一二五〜一二〇〇年)・南宋の政治家・詩人。字は務観。号は放翁。通常は「陸放翁」の名で呼ばれる。

越州山陰(現在の浙江省紹興市)出身。南宋の代表的詩人で、范成大(はんせいだい)・尤袤(ゆうぼう)・楊万里(ようばんり)とともに南宋四大家のひとり。とくに范成大とは「范陸」と並称された。現存する詩は約九二〇〇首を数える。その詩風には、

愛国的な詩と閑適の日々を詠じた詩の二つの側面がある。強硬な対金主戦論者であり、それを直言するので官界では不遇であったが、そのことが独特の詩風を生んだ。

【語釈】*冬初出遊…冬の初めの外出 *渺渺…遠くはるかに広がっているさま

【通釈】脚の悪い口バで、水がはてしなくけむる霧(もや)に包まれた渡し場を歩いてわたり、その十里ほどの、ささやかな山村に、新たな興味を起こした。それは何についてなのかという、青い旗のかんばんの酒屋(さかや)や黄葉(おうは)になっっているお寺で、道で出逢う人々は、いずれもみな絵の中に出てくる人物であるかのようにだ。